

各関係機関の長
各病虫害防除員 殿

宮崎県病虫害防除・肥料検査センター所長

平成 2 2 年度病虫害発生予報第 1 0 号について

平成 2 2 年度病虫害発生予報第 1 0 号を発表したので送付します。

平成 2 2 年度病虫害発生予報第 1 0 号

向こう 1 か月間における農作物の主な病虫害の発生動向は、次のように予想されます。

○ 発生予報の概要

作物名	病虫害名	発生量の 平年比	記載ページ
施設野菜全般	1 病害全般	—	2
	2 タバココナジラミ類	—	2
冬春きゅうり	1 ベと病	やや少	2
	2 うどんこ病	並	3
	3 灰色かび病	並	3
	4 褐斑病	やや少	3
	5 つる枯病	—	3
	6 ミナミキイロアザミウマ	やや多	3
	7 病虫害全般	—	3
冬春ピーマン	1 斑点病	やや多	4
	2 うどんこ病	やや多	4
	3 黒枯病	前年と同程度	4
	4 アザミウマ類	やや多	4
冬春トマト	1 葉かび病	並	5
	2 灰色かび病	やや多	5
	3 タバココナジラミ類	並	5
	4 トマト黄化葉巻病 (TYLCV)	前年と同程度	5
冬春いちご	1 うどんこ病	並	6
	2 炭疽病	やや多	6
	3 アブラムシ類	並	6
	4 ハダニ類	やや多	6
	5 コナジラミ類	—	7

○ 作物の生育状況 (1月中旬)

冬春きゅうり、冬春ピーマン、冬春トマト、冬春いちごは収穫期であった。

○ 向こう 1 か月の気象予報

天気は平年と同様に晴れの日が多く、気温は低い確率 60%、降水量は少ない確率 50%、日照時間は平年並の確率 40%と予想されている。

(1 か月予報 鹿児島地方気象台 1/21 発表)

○ 発生予報の根拠および防除対策

施設野菜全般

1 病害全般

(1) 1か月予報によると、気温は低い確率70%と予想されており、最低気温など気温の変化には細心の注意を払い、施設内の温湿度管理を徹底する。

特に、コスト低減のため、ハウスサイドや内ホロを多層被覆にしているところでは、施設内が多湿になりやすく、病害の発生が助長される傾向があるので注意する。また、多発してからでは防除効果が劣るので、初期防除を徹底する。

きゅうり：べと病、灰色かび病、菌核病、斑点細菌病、褐斑病など

ピーマン：灰色かび病、菌核病、斑点病、黒枯病、軟腐病など

トマト：疫病、灰色かび病、菌核病、葉かび病、すすかび病など

2 タバココナジラミ類（タバココナジラミバイオタイプQ、シルバーリーフコナジラミ）

[予報の根拠]

(1) 冬春きゅうりでの発生面積率40.0%（平成30.8%）、100葉当たり虫数5.8頭（平成3.2頭）はいずれも平成並である。

(2) 冬春ピーマンでの発生面積率6.7%（前年6.7%、前々年7.1%）は前年と同程度、100葉当たり虫数0.9頭（前年0.1頭、前々年0.9頭）は前々年と同程度である。

(3) 冬春トマトでの発生面積率23.1%（平成28.2%）は平成並、100葉当たり虫数0.5頭（平成2.5頭）は平成よりやや少である。

[防除上の注意]

(1) タバココナジラミバイオタイプQとシルバーリーフコナジラミの形態上の差異は、肉眼での識別は困難である。

(2) 施設開口部に防虫ネット（0.4mm目以下）を必ず設置するとともに、光反射マルチ等の物理的防除手段を利用する。

(3) 黄色粘着トラップ等を設置し、タバココナジラミ類の早期発見に努めるとともに、栽培期間中を通して防除を徹底し、本虫の密度を抑制する。

(4) タバココナジラミバイオタイプQに効果のある殺虫剤が少ないことから、発見したら早めに防除し、薬剤散布後は防除効果に注意を払い、必要に応じて適宜追加防除を行う。

(5) 施設内外の雑草はコナジラミ類の寄主となるので除草を徹底する。また、施設内では栽培目的以外の不要な作物や観葉植物等は栽培しない。

(6) 有効な薬剤に対する抵抗性の発現を回避する観点から、同一系統薬剤の連用は極力避け、ローテーション散布を心がける。また、抵抗性発現の可能性が低い微生物農薬やコナジラミ類を物理的に窒息死させる気門封鎖剤を、防除体系に組み込む。

冬春きゅうり

1 べと病（やや少）

[予報の根拠]

(1) 1月中旬の発生面積率55.0%（平成68.7%）は平成よりやや少、発病葉率4.8%（平成14.0%）は平成より少である。

[防除上の注意]

(1) 湿度が高いときに発生しやすく、激発すると防除が困難となるので、予防散布に重点をおき発生が見られたら初期防除を徹底する。

(2) 窒素切れや草勢の衰えは発生を助長するので、肥料切れしないように肥培管理に注意する。

2 うどんこ病 (並)

[予報の根拠]

- (1) 1月中旬の発生面積率35.0% (平年46.3%) は平年並、発病葉率1.7% (平年4.4%) は平年よりやや少である。

[防除上の注意]

- (1) 病勢が進展してからでは防除効果が低くなるので、予防に重点をおく。
- (2) 薬剤耐性菌を生じやすいので、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。
- (3) 乾燥時に多発するので、ほ場が過乾燥にならないように管理に注意する。

3 灰色かび病 (並)

[予報の根拠]

- (1) 1月中旬の巡回調査では発生未確認である。
(平年：発生面積率5.2%、発病果率0.2%)

[防除上の注意]

- (1) 多湿条件で発生しやすいので、日中の換気、夜間の加温等で湿度低下を図り、曇雨天日には加温機の送風を作動させる等、結露防止に努める。
- (2) 花卉等の発病に注意し、予防を徹底する。なお、薬剤耐性菌を生じやすいので、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。

4 褐斑病 (やや少)

[予報の根拠]

- (1) 1月中旬の発生面積率30.0% (平年41.0%)、発病葉率2.2% (平年5.2%) はいずれも平年よりやや少である。

[防除上の注意]

- (1) 多発してからの防除は困難なので、初期防除を徹底する。
- (2) ベと病の後に激発することがあるので、ベと病の発生が多い圃場では特に注意して予防を徹底する。
- (3) 窒素質肥料の多用は発病を助長するが、逆に少ないと草勢の低下を招くので、適正な肥培管理に努める。
- (4) 摘除した発病葉は、ほ場外に持ち出し処分する。

5 つる枯病

[防除上の注意]

- (1) 農林振興局 (地域農業改良普及センター) からの情報では、本病の葉での発生が確認されている。
- (2) 多湿条件下や窒素過多、乾燥などによる草勢低下で発生しやすいので、適正な肥培管理に努める。
- (3) 発病前からの薬剤散布による予防に重点をおくとともに、カルシウム欠乏等によるカップング症状ができれば、本病が葉縁から侵入し、発病しやすくなるので早めに防除する。

6 ミナミキイロアザミウマ (やや多)

[予報の根拠]

- (1) 1月中旬の発生面積率10.0% (平年6.0%)、葉当たり虫数0.14頭 (平年0.12頭) はいずれも平年よりやや多である。

[防除上の注意]

- (1) 多発してからでは防除効果が低くなるので、低密度のうちに防除する。
- (2) 卵・幼虫・蛹・成虫が混在し、卵と蛹には薬剤がかかりにくいので、7日間隔で2~3回の連続した防除を行う。

7 病害虫全般 (改植時の留意点)

[防除上の注意]

- (1) ウイルス病を媒介するコナジラミ類やミナミキイロアザミウマに対しては、以下

のことに留意し、次作の発生源を絶つように努める。特に前作において、キュウリ黄化えそ病が発生したほ場においては必ず実施する。

①前作きゅうりの栽培を終了する前に、殺虫剤を7日間隔で3回散布する。

②栽培を終えたら、ハウス内の除草を徹底するとともにきゅうりを完全に抜根する。

③抜根後は、最低でも10日間は蒸し込む。(平均気温が20℃のときの蛹期間が約7日であることから、蒸し込みによる施設密閉高温化が最低でも10日間は必要。)

④蒸し込み期間中は、粘着板を設置し成虫を捕殺する。

⑤後作きゅうりの定植時には、必ず粒剤を施用する。

(2) 前作に褐斑病などの発生があった場合には特に注意し、定植後直ちに予防防除し感染を防ぐ。

冬春ピーマン

1 斑点病 (やや多)

※ 平成22年度病害虫発生予察注意報第3号(平成23年1月25日発表)参照

[予報の根拠]

(1) 1月中旬の発生面積率53.4%(平年23.0%)は平年よりやや多、発病葉率5.0%(平年1.3%)は平年より多である。

[防除上の注意]

(1) ハウス内が高湿多湿にならないように、換気と水管理に注意する。また、整枝を行って茎葉が過繁茂にならないようにする。

(2) 病勢が進展してからでは防除効果が低いので、予防散布を行う。

2 うどんこ病 (やや多)

[予報の根拠]

(1) 1月中旬の発生面積率40.0%(平年64.2%)は平年よりやや少、発病葉率11.6%(平年6.8%)は平年よりやや多である。

[防除上の注意]

(1) 乾燥した条件で発生しやすいので、乾燥させすぎないように適正な水管理に努める。

(2) 病勢が進展してからでは防除効果が低いので、早期発見に努め発病を確認したら早めに防除する。

(3) 上位葉への進展が見られるなど病徴の激しいほ場においては、1回散布では防除効果が現れにくいことがあるので、2回以上の防除を実施する。

(4) 微生物農薬は予防的効果が主であり、特にダクト散布では散布ムラが生じやすいので、定期的に化学農薬も併用する。

3 黒枯病 (前年と同程度)

[予報の根拠]

(1) 1月中旬の巡回調査では、15ほ場のうち1ほ場で微発生^(注)(発病葉率0.5%未満)である。

(発生病率：前年0.0%、前々年21.4% 発病葉率：前年0.0%、前々年0.9%)

[防除上の注意]

(1) ほ場内が多湿条件にならないよう換気に努め、排水を良好にする。

(2) 被害茎葉、果実は伝染源となるので、ほ場外に持ち出し適切に処理する。

4 アザミウマ類 (やや多)

[予報の根拠]

(1) 1月中旬のミナミキイロアザミウマの発生面積率53.4%(平年43.3%)は平年並、

10花当たり寄生虫数1.9頭（平年1.5頭）は平年よりやや多である。

- (2) ヒラズハナアザミウマの発生面積率26.7%（平年22.8%）は平年並、10花当たり寄生虫数5.6頭（平年3.1頭）は平年よりやや多である。

[防除上の注意]

- (1) ミナミキイロアザミウマは、10花当たりの寄生虫数が1頭から被害果が出始めるので、発見したら早めに防除する。
- (2) ヒラズハナアザミウマは、生息密度が高まると被害が発生するので注意が必要である。
- (3) 卵・幼虫・蛹・成虫が混在し、卵と蛹には薬剤がかかりにくいので、7日間隔で2～3回の連続した防除を行う。
- (4) 両アザミウマの薬剤感受性は異なるので、防除の際は使用する農薬に留意する。
- (5) 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、同一系統薬剤の連用は避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布に努める。
- (6) 被害の激しい茎葉・果実のハウス外への持ち出し、マルチ被覆、青色粘着板の設置により生息密度の低下を図る。

冬春トマト

1 葉かび病（並）

[予報の根拠]

- (1) 1月中旬の巡回調査では、13ほ場のうち1ほ場で微発生^(注)（発病葉率0.5%未満）である。（平年：発生面積率12.2%、発病葉率1.0%）

[防除上の注意]

- (1) 多湿条件で発生しやすいので、ハウスの換気を良くする。
- (2) 発病初期の防除を徹底する。

2 灰色かび病（やや多）

[予報の根拠]

- (1) 1月中旬の巡回調査における発生面積率23.1%（平年14.5%）、発病株率0.5%（平年0.8）はいずれも平年よりやや多である。

[防除上の注意]

- (1) 多湿条件で発生しやすいので、日中の換気、夜間の加温等で湿度低下を図り、曇雨天日には加温機の送風を作動させる等結露防止に努める。
- (2) 花卉等の発病に注意し、予防を徹底する。なお、薬剤耐性菌が出現しやすいので、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。

3 タバココナジラミ類（シハ・リー・フコナジラミ、タバココナジラミ、ハイトライブQ）（並）

- (1) 1月中旬の発生面積率23.1%（平年28.2%）は平年並、100葉当たり虫数0.5頭（平年2.5頭）は平年よりやや少である。

[防除上の注意]

- (1) 施設野菜のタバココナジラミ類（2ページ）を参照のこと。

4 トマト黄化葉巻病（TYLCV）（前年と同程度）

[予報の根拠]

- (1) 1月中旬の巡回調査では発生を認めていない。
（発生面積率：前年0.0% 前々年7.7%、発病株率：前年0.0%、前々年0.1%）

[防除上の注意]

- (1) タバココナジラミ類（媒介虫）の防除を徹底する。防除対策は、施設野菜のタバココナジラミ類（2ページ）を参照のこと。
- (2) 発病株は伝染源になるので根ごと抜き取り、土中に埋めるかビニル袋に入れて枯れるまで密閉する。ウイルスは植物全体に存在し、発病部位を除去しても伝染源に

なるため、必ず株全体を除去する。

冬春いちご

1 うどんこ病 (並)

[予報の根拠]

- (1) 1月中旬の葉での発生面積率46.2% (平年37.5%)、発病葉率3.1% (平年2.4%)はいずれも平年並である。

[防除上の注意]

- (1) 初め葉裏に発生しやすいので、早期発見に努め初期防除を徹底する。
(2) 激しく発病すると防除効果が低くなるので、予防に重点をおき、発病後は散布間隔を短くするなど発病初期の防除を徹底する。
(3) 発病果など被害部は伝染源になるので、早めに取り除きほ場内に放置しない。
(4) この時期の防除は、ミツバチへの影響が懸念されるので十分に留意する。

2 炭疽病 (やや多)

[予報の根拠]

- (1) 1月中旬の発生面積率15.4% (平年3.2%)は平年より多、発病株率0.3% (平年0.2%)は平年よりやや多である。

[防除上の注意]

- (1) 多湿にならないよう、ほ場の排水対策を十分行う。
(2) 発病した株は早期に除去し、新たな感染を防止する。
(3) 次作の親株には、炭疽病及び萎黄病の未発生圃場からの苗を用意する。

3 アブラムシ類 (並)

[予報の根拠]

- (1) 1月中旬の発生面積率15.4% (平年21.4%)は平年並、寄生株率0.6% (平年3.1%)は平年よりやや少である。

[防除上の注意]

- (1) 多発すると新葉の展開が不十分になり、奇形葉やスス病を併発して、樹勢や果実品質を著しく損ねるので注意が必要である。
(2) この時期の防除は、ミツバチへの影響が懸念されるので十分に留意する。

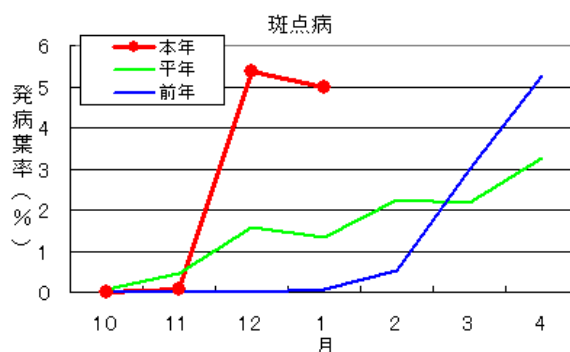
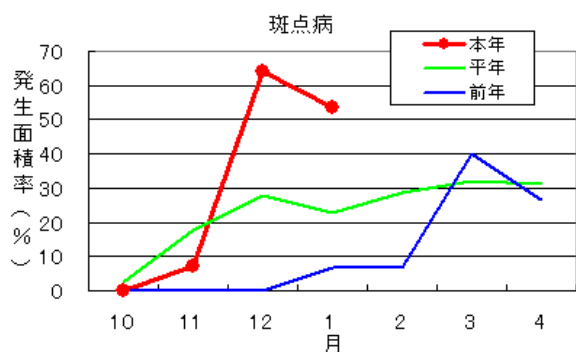
4 ハダニ類 (やや多)

[予報の根拠]

- (1) 1月中旬の発生面積率76.9% (平年48.3%)は平年よりやや多、寄生株率14.8% (平年11.9%)は平年並である。

[防除上の注意]

- (1) 先月と比較し、発生面積率、寄生株率ともに急激に増加しているため注意が必要である。(下図参照)



- (2) 寄生数が増加してからの防除は困難なので、低密度時から防除を徹底する。
- (3) 株整理後、葉数が少なくなった時期に薬剤散布を行うと防除効果が高まる。茎葉繁茂時には散布圧を強めて、葉裏に良くかかるように散布する。
- (4) 薬剤感受性の低下を避けるため、同一系統薬剤の連用は極力避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を心がける。
- (5) この時期の防除は、ミツバチへの影響が懸念されるので十分に留意する。

5 コナジラミ類

[防除上の注意]

- (1) 地域により薬剤感受性が低下したコナジラミ類の発生が確認されているので、地区の普及指導員や技術員の情報を参考にして防除に努める。
- (2) この時期の防除は、ミツバチへの影響が懸念されるので十分に留意する。

(注) 微発生とは、生息が確認されるが発生面積として換算する基準値に達しない密度の発生状況をいう。

○ その他

- 1 農薬適用の有無などについては次のホームページで確認してください。

日本植物防疫協会ホームページ <http://jppn.ne.jp>

農林水産省ホームページ <http://www.maff.go.jp/j/nouyaku/>

農林水産消費安全技術センターホームページ

<http://www.acis.famic.go.jp/>

- 2 農薬の使用に当たっては、農薬使用基準の遵守並びに危被害の発生防止に努める。

- 3 発生量（程度）の区分

多	い	(高	い)	やや多いの外側10%の度数の入る幅
やや多		(やや高	い)	平年並の外側20%の度数の入る幅
平年並				平年値を中心として40%の度数の入る幅
やや少	ない	(やや低	い)	平年並の外側20%の度数の入る幅
少	ない	(低	い)	やや少ないの外側10%の度数の入る幅 (平年値は過去10年間の平均)

- 4 予察情報の種類

病虫害防除・肥料検査センターから発表する情報は次の5つです。

- (1) 予報・・・向こう1か月の発生状況を予測し、毎月25日前後に発表する。
- (2) 注意報・・・主要な病虫害の多発生が予想され、かつ早めに防除が必要な場合に発表する。
- (3) 警報・・・主要な病虫害の大発生が予想され、かつ緊急に防除が必要な場合に発表する。
- (4) 特殊報・・・県内で初めて発生を認めた病虫害がある時や、病虫害の発生様相が特異な時に発表する。
- (5) 防除情報・・・注意をうながす必要がある病虫害の発生状況や、各種の防除技術指導情報について随時発表する。

○ お知らせ

病虫害防除・肥料検査センターでは、ホームページで情報を提供しています。
ホームページアドレスは、<http://www.jppn.ne.jp/miyazaki/>です。

【文書取扱】

病虫害防除・肥料検査センター 生頼

TEL:0985-73-6670

FAX:0985-73-7499

E-mail: byogaichu-hiryo@pref.miyazaki.lg.jp